



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

Feb. 4, 1998, No. 6

ASLE-Japan第3回全国大会（1997年）発表要旨

大地の一員、宮沢賢治

Karen Colligan-Taylor, University of
Alaska, Fairbanks

気候変動枠組み条約第三回締結会議の予備会議に参加したアラスカ大学の地球物理研究所所長赤祖父俊一教授の話によると、米国副大統領ゴアが発表の中で、地球の温暖化は70年ぐらい前に、ある日本人に予想されたと述べたそうです。ゴア氏が『グスコブドリの伝記』の話でだれに教えてもらったのかは分かりませんが、この「ある日本人」は確かに宮沢賢治のことで、エコロジーの理解の普及に伴って、賢治の作品をこういう視点から読み直している読者は少なくないと思います。賢治の文学は日本の歴史の中で綿々と続いてきた上層階級の単なる自然鑑賞という狭い域を越え、西洋の科学と東洋の伝統の混合による新鮮なエコロジー的哲学を提供しています。

近代化の過程で大地の倫理学を伝えてきた神話が語られなくなり、教育がテクノロジーや情報の収集を果たす役割にすぎなくなった現代では、新しい神話が必要となりました。神話学の研究で有名なジョゼフ・キャンベル氏がいうように、これは「個人を地域グループと同一化するのではなく、この惑星全体と同一化するような神話」です。神話は若者がある共同体のメンバーになるために必要な儀式を記録しますが、現代ではこの儀式がなくなり、「生まれ変わる」機会はほとんどありません。宮沢賢治はその共同体を大地全体に延長し、その童話の主人公、または読者に、大地のメンバーになるための儀式を与えています。

『狼森とざる森、盗森』では、岩手山は土と岩からできた、ただの塊ではなく、そこに存在する草や森や狼や人間の共同体でもあります。エコロジーからの視点としてとても大事なことは、ある場所を時間の流れの中で見ることです。この童話は岩手山の噴火とその後起こる植物遷移の話で始まり、人間と自然との交渉として展開します。人間は森の中で三つの儀式によって共同体のメンバーとして認められ、賢治は、人間が森（大地の精霊）に許可を求め敬意を払えば、ほかの動植物と仲良く共存できるはずだというメッセージを与

えています。しかし最後に森にささげる栗餅がだんだん小さくなっているのは、人間は自然から遠ざけられ、聖なる地点に対するエチケットを忘れてしまっていることを意味するのでしょうか。

『なめとこ山の熊』では、熊が山の神そのもの、または山の神が代表する自然界の使いとして解釈できます。環極北（かんきょくほく）諸民族の狩猟文化に声を与える神話では、熊は地上の案内者と見なされ、または大熊（おおくま）座として夜中の旅の指針となります。冬は地下に籠り、春は小熊を連れて地上に現れることによって、我々をこの世とあの世の間を案内し、死は生の永遠の循環の始まりだということを象徴的に教えてくれます。また、土着民族は熊がさまざまな薬用植物を食べるのを見て、熊が人間の体の病気だけではなく、精神的な迷いをも直す力を持っていると信じていました。今でも熊の胆は薬として東洋の市場で高い価格で売られていますが、『なめとこ山の熊』のナレーターは熊の胆は「腹の痛いのにきけば、傷もなおる」とその薬用に触れながら、読者に熊のもっと大事な治療者としての性格を紹介しています。

話の前半の六日月が暗示するように、人間はいつべんに悟るわけではなく、その自覚が少しずつ満ちていきます。小十郎も様々な神話の主人公と同様に「柄にもなく」山道に迷ってしまい、なんべんも谷へ降りて登り直しているうちに、日常の感覚を脱ぎ捨て、馴染みの場所に異空間を見つけます。子連れの母熊を近くに見、その愛情を込めた会話を漏れ聞くことによって、「ことば」のオリジンに出会い、自分と相手とが同じ生命を共有している存在だと自覚します。

熊が自ら人間に体を与え、その行動によって人間猟師の心を判定するあらゆる熊の原形（archetype）となります。なめとこ山の熊が山の頂上で行う儀式では小十郎の純粹さと慈悲を認め、小十郎のような人間がこの世に再生するようにと祈っているのではないのでしょうか。我々読者もこの最後の儀式に参加し他者への慈悲によって精神的に死をもって罪を購い、宇宙の一員として生まれ変わります。[引用はジョゼフ・キャンベル、『神話の力』飛田茂雄訳（早川書房、1994）による。]



国木田独歩『武蔵野』の散歩が意味するもの--自然観の系譜から--

酪農学園大学 岩井 洋

国木田独歩(1871-1908)は、佐々城信子との悲痛なる別離の苦しみを抱えて、1896年9月から97年4月まで上渋谷村宇田川に住み、武蔵の丘陵へと毎日散歩をし、その体験的報告として作品『武蔵野』が生まれた。当時の武蔵野では、江戸期以来の伝統的な、自然と人間生活とが共存する「山里」的農村風景が広がり、その柔らかな自然風景との対話の中に、慟哭も伴う激しい苦悩からの救いを彼は求めたのであった。

明治中期、新興国家日本が強力に進める中央集権化の中で、多くの人々が、彼らを育んだ故郷、彼らとその自然を体験する中で強い地域的帰属意識を抱いていた地方の伝統的農村共同体を離れ、東京へ集まってきていた。それは日本社会が初めて経験する、大規模な人口移動であった。そして多くの地方出身者たちは、西洋的近代化都市化の渦中にある東京で、彼等と地域とを繋ぐ自然のない空間で、地域と一体化することのない異邦人として、自己の存在の根拠を失って生活していた。無論独歩もその一人であった。

こうした時代背景が、独歩をして日本の伝統的な隠者の精神へと立ち返らせ、中世以来の隠者たちが、人間としての存在の苦悩を自然との対話の中で浄化し、詩文に昇華したところの「山里」的自然へと彼を誘い、上渋谷村に住まわせ、武蔵野への毎日の散歩へと彼を促したのである。

「山里」的自然の中での自然との深い対話的な関係の中で、自然と人間は共存性のみならず、同質性を得ようになる。自我は求心的な内向化ではなく、自然という外的方向へと広がりゆく。周囲の自然は自我の投影されたもの、自我の広がりとして自我を受け入れる。かくして自我はその肉体性を超脱し、精神化し、自然との透明な一体化を獲得するに至る。

こうした自然と自我との深い一体化をよく示すのが、隠者文学そして独歩の武蔵野における、自然の音への深く鋭敏な感受性である。つまり、そのような音は、詩人の内面性と自然の音との深い一致の結果であり、自我と自然とを均質に貫

く人間(世界)存在の実相、老荘の自然(じねん)、芭蕉の「造化」、独歩の言う「永遠の呼吸」の黙示録的な静寂の語りかけである。

西行におけるひぐらしの声、鶯の飛び立つ音、山里の鐘の音、芭蕉における蛙の古池に飛び込む音、蟬の鳴き声、僧の杵の音、独歩における風音、時雨、木の葉の落ちる音、滴聲の軒から落ちる音など、隠者精神に映る音は、「寂漠」という人間存在の有限性への深い悟りが生む諦観の心映えのみが聞き得る、静寂さの語りかけである。

独歩の『武蔵野』では、視覚を旨とするヨーロッパ的自然表現に対し、このように聴覚的にきわめて深い自然感受が行われている。この感受性は、自然の中への散歩という自然の中で自然に包まれる体験性、観念的ではないその具体的実在感覚性に基いている。かくしてこの作品では、日本の自然観、とりわけ隠者精神がその通奏低音を形作っていると言わざるを得ないのである。

自然にまつわる正統と異端----アン・ブラッドストリート

占星術の占星術 慶応義塾大学大学院 佐藤光重

まだ占星術が科学として通用していた十七世紀においては、ソローが否定的に捉えている占星術的な見方こそ、宇宙と身体とのハーモニーを読み取る幻視者(SEER)の視点だった。そこで、十七世紀における幻視者の世界観を、異端の占星術に求めた。

十七世紀にも西洋は、自然と人体の対応を大宇宙と小宇宙として捉えていた。大宇宙と小宇宙とは、構成要素においても対応し、エンペドクレス以来、宇宙は土、水、火、空気の四元素から成ると考えられていた。さらに、ヒポクラテスの体液学説も取り入れられる。四元素、四体液、さらに加えて四季が対応する世界が出来上がっていた。

天体の動きが地上の動きを支配するとするのが当時の世界観であるので占星術が科学として通用していたこともうなずける。ただし、占星術には、天変占星術と宿命占星術という二つの種類があった。キリスト教思想と永く対立しあったのは宿命占星術のほうだった。天界の星辰が人間の行動に影響するとい

◎山村文化と山岳伝承研究会

グルノーブル大学との共同プロジェクト「山岳文化」(環境、地理、文学)のひとつ。行き詰まった大都市文化の打開を、歴史的な山間小都市の活性化、周辺の山村の整備、山岳地帯への都市機能の分散によって実現するプロジェクトの基盤研究として、まず、山村の文化と生活、そして山岳地帯の環境特性を文学や民間伝承、山岳信仰にさぐる。日本とヨーロッパを比較する学際的研究。文学ではジオノなどの作品に描かれた「山に住む」ことの苦しさ喜び、そしてその問題と特性を考える。日本では大江や賢治の文学を環境の視点から読み直し、そこにおける神話的言説(エクリチュールアルカイック)を、民間伝承や民間信仰の掘り起こしによって再建される「(森や山の)神話」と対比させ、自然との共生の方向を探る。現在ELLUG社で「山のエクリチュール」(仏文600p)を印刷中。9月には狩猟伝承「荒獵師」シンポジウムを開催。来年は「山姥」シンポジウムを予定。また、伊那谷やフランス・アルプスへの調査旅行も計画。メンバーはルソー、セナンクール、ルナール、ラミュス、ジャコテ、ポスコ、サンド、ネルヴァル、ジャム、賢治、大江、中上健次、民話、神話などの研究者。月1回、名古屋大学で研究例会を開催。

問い合わせ先: 名古屋大学文学部仏文研究室・篠田知和基

fax 052-789-2293 j46107a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

うこの占星術の発想に従えば、ともすると神よりも、人間の自由意思よりも偉大な支配力を、星に与えてしまう事になるからだ。

ところが、二つの占星術の差異は微妙であり、民衆の間では、異端という自覚もなく宿命占星術が普及していった。

セイラムで魔女狩りが起こる十七世紀末、ボストンの聖職者を中心に天変占星術と宿命占星術のけじめをつけようとする気運が高まってきた。魔女狩りに対して、裁く側にいたひとりの有力者が、コットン・マザー牧師である。しかし、彼も裁判の十年ほど前には、一年を占う暦の本『ボストン天体暦』を出版していた。マザーが異端の占星術を修得していたことを、歴史家のマイケル・ウィンシップは指摘している。

また歴史家チャドウィック・ハンセンは、『セイラムの魔女狩り』の中で、アンドーヴァーにおける告発の様子を記している。それによると、町の住民のうち、三、四十人ほどが、占星術に荷担しているとの廉で告発されている。このひとりに、ダドリー・ブラッドストリートという人物名が挙がっている。ハンセンは人名を挙げてのみだが、被告が詩人アン・ブラッドストリートの息子であることはほぼ間違いない。

さらに、最近、歴史家のリチャード・ゴドベアーは、占星術に関して、マザーとブラッドストリートとを結ぶ、意外な人脈に着目した。十七世紀後半、ニューハンプシャーのハンプトンにシーボーン・コットンという牧師と、妻ドロシーがおり、ドロシーは、アン・ブラッドストリートの実の娘であった。夫婦は占星術に打ち込んでいた。夫が所有していた抜き書き帳には、十六世紀以来イギリスで流行していた『ゴドフリダスの暦』からの写しが見つかる。彼らの占星術に関する知識が、母親のアン・ブラッドストリートから受け継がれている可能性を、ゴドベアーは指摘している。

ブラッドストリートは、大宇宙、小宇宙の世界観にもとづいた詩の連作を書いている。それは、数字の四にまつわる四つの詩、「四元素」「四体液」「人間の四段階」そして「四季」だ。ゴドベアーは、ブラッドストリートの「四体液」そして「四元素」に注目した。しかし、ブラッドストリートと宿命占星術との関わりを探るにあたっては、むしろ彼女の作品「四季」こそ着目すべき作品であると思う。なぜなら、作品は事実上、ブラッドストリートの手による暦となっており、ここにコットン・マザーの『ボストン天体暦』、シーボーン、ドロシー、のコットン夫婦が書き写した『ゴドフリダスの暦』に連なる、宿命占星術的な暦の系譜が浮上してくるからだ。

ブラッドストリートの「四季」では、擬人化した春、夏、秋、冬の主人公が順に語り手となる。その際、三月から翌年の二月まで、太陽が黄道十二宮を巡ってゆく構成をとる。そして、作品には星の影響が四季に作用している様子が述べられている。こ

れは、地上の存在が特定の星の支配下にあるとする、大宇宙、小宇宙の観念だ。またブラッドストリートは暦と同じく、特定の時期に為すべき農作業を記している。その際、人の活動さえ、彼女はシリウス星の影響下に置いている。詩人ブラッドストリートの眼は、占星術師の眼でもあり、彼女は十七世紀の幻視者として宇宙を読み解いていると解釈できる。

政治的風景としての〈自然〉

愛媛大学 木下 卓

その本質において、またその表象のされかたにおいて「自然」をめぐるあまたの言説は、政治的なものと無関係ではありえない。無関係だと言うのなら、それは「自然に帰れ」、「緑を守ろう」程度のオタメゴカシのファッションとしての「自然」に乗せられているだけ。いや、このファッション自体がもつ政治性にまったく気づいていないのなら、それはたわごとどころではない。

たとえば、初めて「自然」が発見された18世紀のイギリス。農村における土地囲い込み、都市における産業革命一近代化のイデオロギーと〈自然〉の発見は硬貨の裏表であったし、この時代に最盛期を迎えた庭園文化（風景庭園とよびなされている英国式庭園）もホイッグ党のリベラル勢力の政治姿勢を抜きにしては語れないのである。このことは、日本における「自然」にも当てはまるだろう。

しばしば「自然」の見方として引き合いに出される「花鳥風月」という抽象化され、洗練された美意識とは、王朝文学におけるそれであり、その背後にある天皇制イデオロギーとの関係を無視するわけにはいかないだろう。したがって、こうした美意識を受け継ぎ、物語的文体ではなく、匂いや移りでつながってゆく短く切れた文体を好んだ川端康成（1899-1972）のノーベル文学賞受賞記念講演「美しい日本の私」とは、天皇制イデオロギーの肯定にほかならず、それは晩年における保守的、もしくは反動的な政治的発言や行動となつてあらわれたのである。

こうした伝統的な美学を支えてきた自然観の背後に隠蔽され、抑圧されてきた異なる〈自然〉を初めて意識的に提示したのは、中上健次（1946-1992）である。彼は、自分の故郷である紀州を舞台とした小説、『岬』、『枯木灘』、『千年の愉楽』、『鳳仙花』などにおいて自らの複雑な家族関係を素材にして血の葛藤の秘密を探りながら、その根底にあるものを明るみに出してゆく。そして、『木の国・根の国物語』において、京都と奈良の中央権力との争いに敗れた者たちが逃れ、流されてきた紀州という地が神武以来、差別と被差別

◎シンポジウム「有害化学物質と生態学」

日時：1998年3月28日（土）午前9時～12時

場所：京都大学総合人間学部（京都市左京区北白川追分町）（日本生態学会第45回大会の一部）

内容：カーソン『沈黙の春』やコルボーンら『奪われし未来』などの内容紹介に始まり農薬や環境ホルモン等の野生生物に及ぼす影響の事例研究と有害化学物質の生態系へのリスク評価についての5講演と総合討論。

企画者：多田 満（国立環境研究所）・田中嘉成（横浜国立大学）

問い合わせ：、mtada@nies.go.jp、〒305-0053つくば市小野川16-2 国立環境研究所

の渦巻く地であったこと、いわば逆立ちした国家= 闇の国家だと指摘する。このような歴史をもつ紀州のく自然>とは、「美しい風景」とは全く無関係に存在する、人間の支配を拒絶する荒ぶる神々が棲みついた、ただひざまずいて祈るしかないく自然>なのである。それは、たびたび彼の小説に描かれる、人間の力を凌駕して成長してゆく外来種のセイダカアワダチソウに表象されるものである。紀州のく自然>とは、人工的に定型化された「花鳥風月」という、天農制イデオロギーのもとでその生命の本質を奪われた「自然」ではなく、あらゆる支配や枠組みから逸脱し続け、天皇制イデオロギーに刃向かい続ける死者の魂や超自然的な存在が徘徊する、政治的なく自然>にほかならないのだ。

日本の環境保全運動と文学

名古屋大学 加藤貞通

明治以降の日本の環境保全運動とそれに関連する文学を掘り起こしていくと、日本のネイチャーライティング/環境文学の可能性が見えてくる。全般的に見て、「近代化」が必然的に民俗の改変と自然環境破壊をともなったことは歴然としている。アジアの国々の中で近代化の最先端を走ってきた日本は、環境破壊もまたいち早く経験した。まず足尾銅山鉛毒事件と田中正造の奮闘があった。『田中正造全集』や荒畑寒村『谷中村滅亡史』その他の評伝に記録された田中正造の、日本民衆の自然観に深く根ざした人権思想は注目に値する。島崎藤村の『夜明け前』には明治政府の森林破壊の様子が描かれている。また南方熊楠の神社合祀反対運動関連書簡は、今日の環境保全運動の根幹であるエコロジー思想に大きな示唆を与える力を秘めている。

反戦運動や核兵器廃絶運動は、一般に平和運動などと呼ばれ、環境保全運動とは考えられてこなかったが、近代国家による戦争が常に最大の環境破壊だったこと、特に核戦争は恐るべき環境破壊を引き起こすであろうことは疑いない。井伏鱒二の『黒い雨』を始めとする反戦・反核思想に関わる文学は、重要なネイチャーライティングの水脈をなしている。人工化学物質による環境汚染の脅威は、レイチェル・カーソンが警告したように原爆の脅威に劣らない。1950年代から70年代にかけて、高度経済成長にともない私企業の工場排出物によって引き起こされた数々の公害---水俣病、イタイタイ病、新潟水俣病、四日市喘息、etc.---これら日本の公害の文学を代表する石牟礼道子の『苦海浄土---わが水俣病』

は、環境の汚染・共同体崩壊の脅威に触発され、内なる自然の再創造を余儀なくされた者のネイチャーライティングとして、近代日本の精神構造を揺さぶるインパクトを秘めている。

有吉佐和子の『複合汚染』が告発した食品公害・水士汚染・薬害事件はその後も後を絶たないばかりか、ダイオキシン、窒素酸化物、酸性雨、フロンガス、環境ホルモン、etc.と汚染物質は次々新手が登場し、もはや「公害」という概念では扱えない領域にまで広がった。今や環境問題の元凶は、私企業ばかりでなく、国や地方自治体による大型公共事業や一般市民の大量消費型生活スタイル自体に在ると見なされ、またその被害は人間のみならず自然の生き物・山川草木すべてに及ぶことが意識されるようになった。数々の大規模開発プロジェクト、経済最優先政策・過度の中央集権、農林水産行政の迷走、等々に関わる環境保全運動の様子は、福岡正信『自然農法わら一本の革命』、天野礼子『萬サと長良川』、根深誠『白神山地』などにその一端がうかがえる。

鶴見良行の『マングローブの沼地で』を筆頭とする国際派のエッセイは、今日の環境保全問題にとって国際的視野と柔軟な歴史感覚がいかに必要かを語る。特に近代化を急ぐ東アジアにおいては、明治以来の種々の環境問題がすべて重複して、しかも日本が深く関わって、発生している。世界市場や貧困・人口・民族・南北問題・食糧・地球環境問題などの重圧下にあって、個々の土地独自の自然環境・生態系および民俗の実態に迫る国際派のネイチャーライティングは、今後その存在が再認識されることになろう。

近/現代日本のネイチャーライティング とその系譜

金沢大学 生田省悟

この発表の目的は、自然を巡る近/現代(明治以降)の言説を概観し、その特質を確認することにある。その上で、ネイチャーライティングを日本文学のジャンルとして定位するよう提案したい。

周知のとおり、日本には自然を巡る言説が夥しく存在する。だが、あくまでも私見に過ぎないが、自然それ自体が前景化され、自然と個人の関係性が明確に意識されるのは近代以降の現象ではなかったか。その際、準拠枠としての役割を果たしたのが、とりわけ西欧のロマン主義である。書き手たちはロマン派の内に自らとの同質性を見出し、自らの言説を

◎パトリック・マーフィー(Patrick Murphy)氏講演会

演題：環境倫理、環境正義と多文化の文学

(Environmental Ethics, Environmental Justice, and Multicultural Literature)

日時：1998年3月21日(土)午後2時~4時

場所：仙台市戦災復興記念館(仙台市青葉区大町二丁目)(通訳つき)

(平成9年度東北大学教育開放講座・第13回アメリカ研究講座の一部、協力：日米教育委員会、アメリカ研究振興会)

問い合わせ：022-217-6158、<http://www.kai-c.tohoku.ac.jp/>)

補強する心情的根拠としたのだった（ロマン派受容の経緯、偏りについては、今後より詳細な検討が求められる）。その痕跡を早くもとどめる蘆花、独歩をはじめ、書き手たちはこうして自然体験を記述していく。

特徴的なのは、少なくともナラティブの次元で自己と自然との交歓が一気に成立する状況だろう。書き手は自然との濃密な関係とその至福にこだわりなく身を委ねるのである。私的なものとして発生するこの関係において、書き手は感覚を研ぎ澄ませ、自然が見せる微妙な相貌の意義を語り続ける。これは、アメリカのネイチャーライティングの主要な課題である〈場所の感覚〉と対比すると興味深い。ひとつの場所との持続的な交渉の過程に自己のアイデンティティ探究の契機を求める、意識化された心的作用が、日本の言説には希薄なのである。視点を変えれば、日本の場合は〈場所の感覚〉をすでに前提とするような暗黙の機制が、それぞれの書き手に作用しているとも考えられる。吉田絃二郎、野尻抱影をその顕著な例として挙げておきたい。また、長らく周縁に置かれてきたアルピニズム文学—近代に誕生し、やはりロマン派などを背景とする新たなジャンル—ですら、こうした特質を顕著に示している（小島鳥水などを嚆矢とするこのジャンルについても、今後の研究が期待される）。

この、自然と自己との密やかな関係に収斂していく様態を、いわば日本的パストラルの世界と考えることも可能だろう。現在でも、その基本的な性格は変わらない。しかし、改めて指摘するまでもなく、ここに新たな要素が生じてきている。経済活動の変化に伴う生活形態の変容と環境問題のことである。その具体的な現われは、たとえば石牟礼道子、内山節に見られる。彼らは人間の暮らしと自然の織りなす共同体空間が公害、産業構造の歪みによって滅びていくのを凝視する。無意識のうちに蓄積された〈場所の感覚〉が、〈場所〉の崩壊に直面して、はじめて日本の言説に自覚されるに至ったと言っても差し支えない。生活と自然が交差する事実を再確認し、その意義を問い直す試みがこのような形で今、確実に進行している。こうした動向にこそ、日本のネイチャーライティングのさらなる可能性が求められるのではないか。

International Trends in Nature Writing

Bruce Allen, Juntendo University

I. Summary of main points:

- 1) A broadening of nature writing's base from the US to global among writers, readers, scholars and critics alike.
- 2) A questioning of the common assumption that nature writing is identified with pastoralism.
- 3) A broadening of the traditional focus on distant, rural, undeveloped and wilderness places, to give increasing attention to nearby, intimate, developed, and urban places. And with this, an evolving of the idea of wildness to better include urban nature.
- 4) A broadening of the traditional concern for "rights of nature" to include a greater concern for "environmental justice".

5) Among critics, a broadening of attention to different literary forms from a traditional focus on with non-fiction essays, to a greater consideration of the novel, drama, poetry and other modes

II. Commentary on these points:

1. From US to global:

This shift includes not only an expanding of the global base of living writers and critics, but also a reevaluation of past world literature. We are questioning and discovering how much of world literature can be included in the genre of nature writing. In Japan the genre of "nature writing" has been hard to define precisely because so much of Japanese writing has been nature-oriented.

2. The pastoral impulse.

Nature writing's traditional identification with pastoralism is necessarily broadening as our world becomes progressively urbanized. We as writers and critics need to realize that unless NW gives more concern to urban nature it may become marginalized and merely nostalgic. This shift is happening in the US, but perhaps it may happen even more in other countries which are urbanized to a greater degree than the US.

3. From big, distant, rural places to small, intimate, urban.

Nature writing's concern with the notion of wildness, especially in the US, has often resulted in a focus on "Big", wild places. But today we are reconsidering both the meaning of wildness and also our ideas of where wildness can be experienced. The concern for "sense of place" will always remain important to nature writers, but the kinds of places we pay attention to will continue to broaden.

4. From rights of nature to environmental justice.

It has often been claimed that environmentalists, and nature writers among them, have been over-concerned with protecting nature but underconcerned about environmental justice; i.e. ensuring an equality of environmental benefits among all people. We need to take care that nature writing doesn't fulfill the stereotyped charge that it is a concern mainly for "rich nature lovers", at the expense of the average population.

5. A broadening of the forms to include poetry, drama, fiction and other modes.

This point needs little argument as it is already occurring naturally. I would simply amplify this in regard to the Japanese situation by urging that Japanese writers and critics might be freer in developing their own forms of expression, without necessarily looking to the West and the US for models. Especially in nature writing, where Japan can claim one of the world's oldest traditions, it would be unfortunate for this to continue.

ダーシィ・マクニクル

阪南大学 西村頼男

マクニクル(1904-77)は、アメリカ合衆国先住民文学がルネッサンスを迎える以前に『包囲されて』(The Surrounded, 1936)を発表したが、発表当時は一般読者に読まれなかった。ところが、その再版が1978年に出版され、また、『敵の空より吹く風』(Wind from an Enemy Sky, 1978)が作者の死後に出版されたことでマクニクルの作品は次第に読まれつつある。

先住民作家の作品の特徴のひとつは、先住民の伝統的な価値観や生活を描き出すことにあるのは当然である。たとえば、1968年にピューリッツァ賞を受賞したN・スコット・ママディの『夜明けの家』(House Made of Dawn)では、狩猟が主人公の成長と深い係わりがある。あるいは、マーモン・シルコウの『儀式』(Ceremony, 1977)では、メディスン・マンが果たす役割は大きい。一方、マクニクルは『包囲されて』において、ママディやシルコウとは違った先住民文学を創造している。作者はこの作品で、白人の文化に接触してしまった若者が容易には伝統的な生活には戻れない様子を描いている。

先住民は、ロマン主義の中でヨーロッパ系の人間から「高貴な野蛮人」と見なされたことがある。合衆国でも1960年代から1970年代にかけて、先住民の価値観や生き方が注目を浴びたことがある。その際、先住民がおかれた歴史的状況を忘れたかのように、自然と調和した理想的な生き方の実践者として先住民を理想化したこともあった。しかしながら、これは余りにも一方的な思いこみである。

東部で連邦政府のインディアン対策局の役人を長らく経験したマクニクルは、現実に先住民がおかれた姿を2つの長編小説で描いた。

N Scott MomadayとLeslie Marmon Silkoの作品について

広島中央女子短期大学 横田 由理

ネイティブ・アメリカンの自然観を色濃く反映したMomadayとSilkoの作品においては、特にその場所との繋がりが重要な意味を持っている。それぞれの代表作であるHouse Made of DawnとCeremonyでは、自己喪失に悩む主人公の癒しの物語の中で、人と自然との調和の取れた関係の再構築が自己回復の大きな要因となり、伝統文化の中で継承されてきた部族の人々とそのhomelandとの結びつきの大切さが伝えられる。又、Momadayにとって自分の部族名にちなむDevil's Towerという場所は自己のアイデンティティーの中核にあり、主な作品の全てにその場所をめぐる物語が登場し、The Ancient Childにおいてはそれが作品の主なモチーフとなっている。

ネイティブ・アメリカンの場所との繋がりを特徴づけるのはそのcommunalな特性で、人々が受け継ぎ集積したものが一つになった場所の記憶(racial memory, collective

memory)は悠久の時に刻むOral Traditionによって受け継がれてきた。特に創世神話と移住物語における場所とその風景は語り継がれる中で神話的世界と現実の生活との重要な架け橋となった。そうした場所を巡る多義的、多層的な意識体験はネイティブ・アメリカンの人々の思考の中核にあり、その宇宙観を取り込む民族的な神話体系の中に位置づけられてきた。MomadayとSilkoの作品もその体系の中にあり、二十世紀という歴史的コンテクストの中で人と場所との繋がりの意味をさらに模索していると言える。

Momaday, Silkoを生んだ南西部という場所は、その乾燥した厳しい気候風土がその不要性故、逆に伝統文化の保持を助けたと言えるが、同時にそれはSilkoがその作品の中で二十世紀のアポカリプスの場として、又、地球と人類への最も大いなる脅威をもたらす悪の権化として登場させる核開発の場ともなってきた。すなわち、人々も含めた地球環境全体の究極的な環境破壊の象徴ともなったその同じ場所が、それ以前そこに暮らしてきたプエブロの人々にとっては部族的な精神性を高めてくれた土地であり、感謝を呼び起こす場所であったとSilkoは指摘し、同じ土地への対峙する価値観を提示する。Silkoはその作品の中で白人到来以後の環境の破壊と人間社会の疲弊を描き、主流社会からは積極的に明らかにされないアメリカ史とアメリカの環境史との接点を明らかにしその問題点を提示している。又、環境破壊の物語は彼らとその神話体系の中核とする創造神話の対極にある消滅の物語でもある。そうした終末論的予見の中にあって地球を即物的にしか捉える事のできないものの抱く底知れない恐怖は長い民族の歴史の中で培われた「母なる大地」に対する深い信頼に支えられた人々の持つ希望と好対照を生んでいる。ウォレス・スティグナーも「場所はゆっくりとしか場所になりえない」と述べたように、ネイティブ・アメリカンの持ち得た大地への深い信頼と帰属観はアメリカという土地に長く親密に関わってきた共同体のみが培う事のできた民族の力に他ならない。

◎ゲイリー・スナイダー氏来日

スナイダー氏が仏教伝道文化賞を受賞し、その授賞式に出席するため来日します。

授賞式は3月13日(金)三田の仏教伝道センタービルにて。その日の夕方から下記の要領でインフォーマルなお祝いとウエルカム・パーティーが開催されます。

場所 大手町カサピアンカ(電話03-3201-2388)
時間 18:00~20:00
会費 7000円

申し込みは山と溪谷社山岳図書編集部 三島悟(03-3343-6147)またはアウトドア編集部 岡田都(03-3343-6147)まで。3月6日までにお申し込みください。

ネイチャーライティングの新しい展望

広島大学 伊藤詔子

【ASLE-U.S.第2回大会基調パネルスピーチ概要】

日本がネイチャーライティングというジャンルを文学研究あるいは広く日本文化の中に導入したのは、直接的には英米文学研究者の間が最初であった。ここには日本の英米文学研究風土や、広く外国文学研究制度が深く関わっている。研究社の『英語年鑑』によると日本には400近い英語英米文学研究団体があり、英語英米文学に関係する教師による英語教育、アメリカ文学、イギリス文学、世界の英語文学、各個別作家研究、時代やテーマ別学会等々が組織され、世界でも稀有な活況を呈している。よい意味でも悪い意味でもそれは、翻訳大国である日本の言語文化を支える一大勢力であり、アメリカンネイチャーライティングにおいてもたいの作家は紹介されている。作家と共に次々起こる新しい研究方法 new criticism, psychoanalytic criticismから始まって最近の deconstruction, new historicism, post-colonialism, multiculturalism等も、比類なき熱心さで紹介応用に努力が傾けられてきた。経済では輸出大国である日本は言語文化においては完全に輸入大国といえよう。

ではネイチャーライティング及びその研究方法である ecocriticismもそうした一連の動きの一環であろうか。私は少し違うと考える。『ウォールデン』の初訳が出たのは1908年東京大学の理科の学生、水島耕一郎によるが、その後1996年度年間翻訳書best fiveに入った岩波の飯田実訳まで、実に11種のそれぞれに立派な訳業があり、日本のソロー受容と研究の足跡を示す鏡ともなっている。日本にはソロー的作家と思想の伝統があり、古いところでは鴨長明の『方丈記』(1212)という古典がある。西洋と東洋、時代と社会、庵に入る動機や年齢や期間や建築方等の基本的な違いはあるが、Walden hutと方丈は驚くべき思想の類似をみせている。夏目漱石の英訳によると長明の庵は"ten feet by ten, its height was less than seven. It occupied no permanent site, because I had no mind to settle in a definite place. A clay-built floor, a thatched roof, and planks linked together with hooks, so that they might be removed easily if necessary....Two carts were enough to carry the house itself." (雑誌『太陽』の『方丈記』特集掲載の庵復元図で、茶室の原型的特質を説明した)。

日本の茶室が美学的空間であると共に"meditation and negotiation"の政治的空間であるように、Walden hutもコミュニティの中での政治的な生き方の提示であった。『ウォールデン』のペルソナloonはネイティブアメリカンの神話でtrickstar的存在であり、長明の時局風刺も鴨の長く明晰な鳴き声として、聞く耳を持つ人には甚の人間の声よりも真実を語った。

つまりネイチャーライティングは、日本の言語文化の最も古い長い伝統の一つであり、ecocriticismというのは、日本の英米及び外国文学研究者が、恐らく初めて日本的感性や主体性を持って研究に当たりその方法論を構築できる、稀有な批評方法ではないかと予想できる。森が育む豊かな文化や宗

教、表音文字と象形文字と和製外来語、外来語混じりの複合シンタックスや語感等、ネイチャーライティングというメタ文学ジャンルをテーマ化し、ecocriticismというメタ文学批評を構築する充分な用意が、日本にはあるのではあるまいか。もしかしたらここに来て初めて長年方法論樹立に苦闘してきた日本の英米文学研究は、その「長い徒弟時代を終わった」のだし、英米文学研究のpostcolonialな状況から脱する契機を掴めるのかも知れない。

いま試みに、広く世界で文学シンボルとして又テーマとして愛されてきた野生の生き物<鹿>が日米の作家によって描かれる例をみて、比較文化的な考察を加え、2000年の歴史を持つ日本の文学の生き物との共生感覚と、完全に他者として対象化するアメリカ作家の特性を検討したい。まず最初にアメリカ文学が一般的に生き物をどのように表象してきたかを概観すると 1) 善や悪、美や愛あるいはそれらの複雑な観念の象徴として 2) そうした象徴の追跡の対象として 3) 人間社会を風刺的に描写する寓意的な役割を担わされているものとして 4) 動物と人間の一種の友情物語としてという風に大別できるかも知れない。つまり生き物そのものを主人公として人間との関わりを描くというより、多くの場合登場人物の心理や情景の一部として背景的に存在していた。従って自然界の中での生物の位置や、生きている場所(place)への深い瞑想、又自然のおかれている状況への深い思索又は種としてのその生物への生の関心を描くネイチャーライティングとは一線を画する人間中心の物語学が見られた。それは基本的には鳥でも花でも文学作品の中の人間以外の自然のあり方全体に言えることでもあり、鹿についても古今東西の文学で従来キリストや女性性の象徴的負荷を背負ってきた。

ネイチャーライティングの中の動物の扱い方に特徴的なのは、自然を作品の意識や構造の中で前景化することであり、その存在そのものをテーマ化することであることは前提であろう。しかし実際には作品の中で具体的に鹿が占める位置や位相は決して一様でも単純でもなく、ネイチャーライティングの中では従来の視点に生き物としての鹿への視点が重層的に加わっているといえる。そうした重層性への考察がecocriticismの重要なテーマとなってくる。具体的には以下の作品を考えた。

1. Poe -- "Elk" (*Morning on the Wissahiccon*, 1843)
2. Thoreau -- deer, moose (*Walden, Maine Woods*, 1854, 1863)
3. Dillard -- "The Deer in Providencia" (*Teaching a Stone to Talk*, 1982)
4. Nelson -- "The Gift of Deer" (*The Island Within*, 1989)
5. 宮沢賢治「鹿踊りのはじまり」(英訳 "The First Deer Dance," 1921)

分析の詳細を述べる時間はなかったので別稿に譲るとして結論だけ述べる。ネイチャーライティングは自然を観念として扱うことをやめ、個々の生き物を取りまく人間との関わりを感覚的かつ分析的に思考し、鹿の自然の中での生活の強奪

や破壊が社会的政治的構造から生まれてくることをみづめ提示する。鹿を、穏和、キリスト、豊穡といった文学的伝統的象徴性に閉じこめることなく、しなやかな弓なりの背や強い野生の匂い、魔法のような蠱惑的な目をもつ身体性を回復しようとする。特に賢治の作品では、主人公のアニミスティックな想像力で、太陽、風、秋のススキの原と大地からなる地球の総体的感性から鹿を捉え、彼らが人間に語られるべき物語を持つ集団として主体的に登場する。賢治の鹿は七頭で一つの意味を形成し、彼は主人公の感性と鹿の内面を融合する新しい日本語<視覚的オノマトペ>と呼ぶべきものを創造してさえる。Poe, Dillard, Nelsonがいずれも一頭の鹿に注目し、伝統的美学様式や宗教的解釈の可能性、あるいはエロスの体験としてまず語り始めるのと対照的だ。いずれにしてもネイチャーライティング及びecocriticismは、日本の英米文学研究が、世界の文学研究にながしかの貢献を期待出来るジャンルであり批評方法だといえるので、これからの日米のASLEの協力は益々重要になってくるだろう。

Thoreau's Real Sense of Place in Walden

Katsumi Kamioka, Kochi University

【ASLE-U.S.第2回大会発表Abstract】

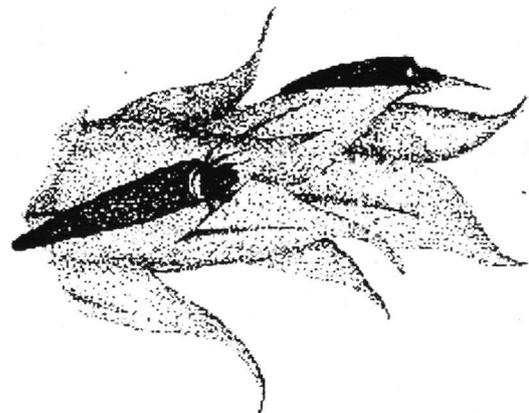
The purpose of this paper is to consider Thoreau's sense of place in Walden through five phases: (1) Walden as an actual place; (2) the origin of Walden; (3) Walden as a sacred place; (4) Walden and cartography; and (5) Walden and history. This is done to show how he thinks of Walden as an ideal place to perfect himself.

It is true that he depicts a strong sense of place, seeing reality through "a freshet of shams and appearances" and acquiring the spirit of place. There he learns a lot which supports him physically and spiritually. But ironically he leaves Walden after two years stay. It is not because the actual place of Walden is destroyed by clear-cutting or reclamation, but because he fears that his vision might tend to fade little by little and that he can't search for fuller relationship between the outward and inner landscape as time goes on. He begins to feel that his inner life might become stagnant and that he might fall into the rut of conformity as long as he stays there.

This goes to the very core of understanding Walden. It reminds the reader of John Daniel's conversion in which he celebrates rootlessness in "A Word in Favor of Rootlessness," and he rejects

his rootlessness as seen in *The Trail Home*. He says, "When human beings settle in a place for the long run, good things occur overall, but there are dangers." Daniel, aware of the dangers of placedness, thinks that in order to get renewal and vitality, some people have to stay at a place and others have to be in motion.

Paradoxically the real sense of place for Thoreau is to belong to a place and commit himself to his surroundings and then to leave there. He finally realizes that to be awake forever is to make a continual discovery of place and self. This is clearly seen in his life after the Walden years, Thoreau mostly staying in Concord and walking around there, but sometimes traveling in search for the tonic of wilderness" lest he should "make a beaten track" for himself. It is just like a swinging of the pendulum between placedness and rootlessness, an alternating rhythm of seeking awareness.



ウエノマルツツトビケラ by Koya Akiyama

ナラティブ・スカラーシップ ——第2回ASLE学会で得た課題 ネヴァダ大学リノ 結城正美

1997年7月17日から19日までの3日間、モンタナ大学（ミズーラ）において開かれた第2回ASLE学会では意欲的で興味深い研究報告が数多く発表されたが、なかでも最終日の最終セッションにおこなわれたイーアン・マーシャルとデイヴィッド・テイラーによる報告が非常に印象的であった。"Contact! Contact! A Walk to Thoreau's Ktaadn" と題された彼らの発表は、ソローの記述をめぐる文学研究に、彼らが実際にクタードン山に登攀した際の経験に基づいた見解を織り込むという「ナラティブ・スカラーシップ」の手法を実践したものであった。

ナラティブ・スカラーシップは、科学的・客観的ディスコースに異議を唱えるフェミニズム批評の動向と相俟って、

環境をめぐる文学研究における新たな批評様式として近年注目を集めている。1995年秋には西部文学学会において「ナラティブ・スカラーシップ——エコクリティシズムにおけるストーリーテリング」という円卓セッションが設けられ、提唱者であるイーアン・マーシャル、スコット・スロヴィックを含む約20名の研究者が作品に関連したパーソナルな経験と文学研究との関係をめぐる議論を繰り広げたと伝え聞いている。また、エコクリティシズム関連文献でもナラティブ・スカラーシップに意欲的に取り組んでいるものが少なくなく、ジョン・エルダー著 *Imagining the Earth* (1985/1996) を嚆矢とし、フレデリック・ターナー著 *Spirit of Place* (1989)、スコット・スロヴィック著 *Seeking Awareness in American Nature Writing* (1992)、ケント・ライデン著 *Mapping the Invisible Landscape* (1993)、デイヴィッド・ロバートソン著 *Real Matter* (1997) 等にアカデミックな文学研究に自身の経験に基づいた見解を取り入れる実験的試みがうかがえる。

マーシャルによれば、ナラティブ・スカラーシップの目的は、「主体（研究者）と客体（研究対象）を分け隔てる壁を壊すことにはなく、両者を互いに結びつけること (making connection)」にある（「何故エコクリティックはストー

リーを語るのか」、西部文学学会円卓セッションにおけるボジション・ペーパーより）。今回のASLE学会でバリー・ロベス、リック・バス、デイヴィッド・エイブラムをはじめとする作家たちの率直かつ真摯な姿勢に接し、環境をめぐる文学を研究対象とする批評家はそうした作家たちの声にいかに応ずるべきか、文学批評家としてどのような役割を担うべきなのか、そして文学研究とりわけ「論文」という制度をどのような方位に向けて再考すべきなのか、という問題を痛切に考えさせられた。

楽観的にすぎるかもしれないが、招待作家が声をそろえてASLEを作家と研究者の「コミュニティ」と称していたことは、この文学分野の研究において試みられている新たな批評様式の可能性を示唆しているように感じられた。「私たち批評家は行為し語る動詞なのだ」とマーシャルが言うように、今後、文学作品をめぐる、これまでひたすら押し殺すように教えられてきた私たち自身のパーソナルな声をアカデミックな場に発してゆくべきなのかも知れない。とはいえ、文学研究がどのようなかたちで「行為」となるのか、私にはまだわからない。深い洞察と機知に富むマーシャルとテイラーの報告を聞きながら、「行為する批評家」という問題を今後検討すべき重要な課題として受け取った。

書 誌 情 報 (1996~98)

[洋書] --- 編著者名アルファベット順

◆Jardine, N., J. A. Second, and E. C. Spary, ed. *Cultures of Natural History*. (Cambridge: Cambridge UP, 1996)……「16世紀から現在にいたるまでの自然誌 (ナチュラル・ヒストリー) の内容と文脈」を明らかにすることを旨とした、イギリス、合衆国、フランス、カナダ、ドイツをはじめとする各国の研究者による24編の論集。

◆McGregor, Robert Kuhn. *A Wider View of the Universe: Henry Thoreau's Study of Nature*. (University of Illinois Press, 1997)……恰好のソロー入門書。エマソンとのぎくしゃくした関係、『ジャーナル』及び『森を読む』の重要性が分かるばかりか、『ウォールデン』(の一部) がなぜ面白くないかまで解きあかしてくれる。これまでの通説を「誤解」として、新たなソロー像を提示してくれていて、まことに刺激的。

◆Mckibben, Bill, ed. *Walden: Lessons for the New Millennium*. (Beacon Press, 1997)……Hardingの最の仕事となったannotated editionを全面的に利用しつつも、副題が示すように環境の書として読み直し多くの有益かつ独創的な注をつけた美装版。しかも安い。

◆Nabhan, Gary Paul. *Cultures of Habitat: On Nature, Culture, and Story*. (Washington, D. C.: Counterpoint, 1997)……民族植物学者であり作家であるナブハンの最新書。自然環境における多様性、文化における多様性、および人間社会・コミュニティの安定性、これら三者がいかなる関係のもとにあるかを探究したエッセイ集。

◆Payne, Daniel G. *Voices in the Wilderness: American Nature Writing and Environmental Politics*. (Hanover: UP of New England, 1996)……*Wilderness and the American Mind* (Nash), *The Idea of*

Wilderness (Oelschlaeger)に続くウィルダネス研究書。エマソン、ソロー、バロウズ、ミュア、レオポルド、カーソン、アビーのウィルダネス観を政治的、宗教的、文学的観点から論ずる。

◆Turner, Jack. *The Abstract Wild*. (Tucson: U of Arizona P, 1996)……大学教授から探検家・作家に転身した著者による8編のエッセイ集。自然環境を抽象的にとらえる見方を痛烈に批判し、具体的な自然との具体的な関わりをもつことの重要性を力説する。

◆Walls, Laura Dassow, *Seeing New Worlds: Thoreau and Nineteenth-Century Natural Science*. (Wisconsin University Press, 1996)……ソローとダーウィン、フンボルトを中心とする自然科学史の関係研究の決定版。Deanの学位論文に次ぐ快挙。

◆(雑誌評論) Abley, Mark. "Snow on the far hills," *The Times Literary Supplement*. 4899 (Feb. 21, 1997)……*Ecocriticism Reader* (1996, UGA) に対しては「マルクス主義者、フェミニスト、有色人種の方々、少しづつめて下さい、また新しい (理論先行のsteel-gray色をした環境文学) 批評理論が来ました」と痛烈。しかし、Gary Snyder, *A Place in Space* には、東洋思想の色合いとやさしい手触りのnature writingと好意的で、タイトルもここから。

◆(雑誌評論) "Green Romanticism"の特集号、*Studies in Romanticism* 35. 3, Fall 1996. (The Graduate School of Boston U.)……Keatsの *To Autumn* を火山灰による天候異変から解読するJonathan Bate "Living with the Weather"、18世紀末の自然科学による個々の有機体と居住環境との関係の解明をColeridgeの有機体論に読み込むJames G. McKusick "Coleridge and the Economy of Nature"など。次号では、Paul H. Fryがecocriticismは結局

◎会誌『文学と環境』について

ASLE-Japan/文学・環境学会の会誌『文学と環境』がいよいよ今秋に創刊されることになりました。現在、その原稿を募っています。投稿規定をお読みの上、多数の投稿をお待ちしています。(会誌編集委員長 上岡克己)

「投稿規定」

1. 内容：文学と環境に関する未発表の研究論文・書評等（和文または英文）
2. 枚数：(a)和文の場合は400字詰め横書き原稿用紙に20～30枚程度。ワードプロセッサ等を使用の場合は横書きで30文字×30行とし、9～14枚程度。英文のレジメ（1ページ、65ストローク×25行）を付すこと。
(b)英文の場合はA4判用紙にダブルスペースで14～20枚程度。1ページは65ストローク×25行。和文によるレジメ（30文字×30行）を付すこと。
書評：400字詰め横書き原稿用紙に6～10枚程度（2400文字～4000文字）。
3. 体裁：表紙に題と氏名、所属先を記入のこと。注は本文の終わりにまとめること。
その他、MLA Handbook for Writers of Research Papers: Fourth Edition もしくは『MLA英語論文の手引き第3版』（北星堂）に準ずる。すでに口頭発表した場合は、その旨を末尾に記すこと。
4. 提出部数：5部（コピーも可）とフロッピーディスク（機種名を明示のこと）。
5. 宛先：編集事務局（〒780-8072 高知市曙町2-5-1 高知大学人文学部 上岡克己）。
封筒に（『文学と環境』応募原稿）と明記すること。
6. 締切：創刊号の締切は1998年3月20日とする。期日厳守。
7. 採否：編集委員会が行う。
8. その他：(a)投稿資格は会員とし、投稿は1名につき1編とする（編集委員が依頼する場合は会員でなくともよい）。
(b)提出された応募原稿は返却しない。
(c)和文の場合、題名には英文タイトルを、また執筆者名にローマ字表記を付すこと。
(d)書評を除き、原則として執筆分担金は仕上がり1ページにつき1000円とする。

Wordsworth非自然詩人説の焼き直しで観念的であり、緑にばかり気を取られずに灰色の石をも見つめようと"gray romanticism"を提唱。

◆(雑誌評論) Rolston III, Holmes. "Nature for Real; Is Nature a Social Construct?" *The Philosophy of the Environment*. (Edinburgh University Press, 1997)……"Nature," "Environment," "Wilderness," "Science," "Earth," "Value"といった鍵になる言葉を取り上げ、それらがすべて「社会的創造物」であることを認めた上で、それでも何とか"we must have nature for real"という結論にたどり着こうとする、涙ぐましいまでに頑張っている論文。思わず応援したくなる必読（と思われる）論文。

[和書] ---編著者名50音順

◆青木晴夫『滅びゆくことばを追って—インディアン文化への挽歌』（岩波・同時代ライブラリー、1998年）……アメリカ北西部の大自然を背景に展開される一言語学者のフィールドワークの記録。

◆天野礼子（編著）『21世紀の河川思想』（共同通信社、1997年）……長江三峡ダム（ダイチン）、アメリカの河川政策転換（開墾局前総裁・ピアード）、長良川河口堰（天野）その他、世界の開発現場からの報告に基づく河川思想の展望。

◆伊藤詔子『森の瞑想 水の巡礼—ソローとアメリカ社会』（柏書房、1998年春刊行予定）……ソローのエコロジカルな想像力に着目し、現代的意義を解明する。

◆稲本正『森の自然学校』（岩波新書、1997年）……植え・育て・使い・遊ぶ。木と森の文化を体感し、考える本。

◆稲本正『木の聲』（小学館、1997年）……オーク・ビレッジを主宰し、木の文化の最前線に立つ著者ならではのエッセイ集。日本文化が忘れ去ろうとしている木の文化、そして森の文化にまつわる語彙と職業が蘇る。

◆岡島成行『林野庁解体論』（洋泉社、1997年）……死に瀕した日本の森と山、林野庁の膨大な赤字を見よ！ 森林再生の願をこめて。

◆小野和人『ソローとライシアーアム—アメリカ・ルネサンス期の講演文化』（開文社、1997年）……アメリカ・ルネサンス期の思想家たちは「ライシアーアム（文化協会）」における講演活動によってその発想と文体を鍛え上げられた。本書は当時の文化的制度に焦点を当てたソロー論であり、ネイチャーライティング論である。最終章は「ソローと尾崎喜八」と題する比較論。

◆巽孝之『恐竜のアメリカ』（ちくま新書、1997年）……アメリカ文化における「巨大なるもの」への妄想を時代を横断して縦横無尽に語る。白鯨からジュラシック・パークへの歴史的連続性、恐竜小説史、そしてそれらの背後にネイチャーライティングへの独自のまなざしが潜んでいる。

◆西成彦『森のゲリラ宮沢賢治』（岩波書店、1997年）……植民地文学を《クレオール文学》へ昇華させ、異人でありつづけるための説話的技法を提示する新しい賢治論。

◆根深誠『風の瞑想ヒマラヤ』（中公文庫、1997年）……ヒマラヤの連峰を背にチベット高原を旅する心・風の瞑想紀行。

◆原後雄太『アマゾンには森がない』（実業之日本社、1997年）……ブラジル、ボリビアなど南米諸国で植林・自然農業の普及、先住民支援事業の実践に取り組む元国際経済アナリストの環境提言。

◆藤井一二『古代日本の四季ごよみ』（中公新書、1997年）……「あしひきの山も近きをホトトギス月立つまでになにか来鳴かぬ」これは天平19年3月29日（旧暦）=5月16日（新暦）の立夏を迎える歌。季節感豊かな日本の風土に生きる古代人の生活カレンダーが甦る！

◆星野道夫『ノーザンライツ』（新潮社、1997年）……ひらめくノーザンライツ（オーロラ）、アラスカの原野の匂い、先住民たち、女性飛行士、川。星野道夫の遺作。

[翻訳] ---編著者名50音順

◆I. ウォルトン『完訳 釣魚大全Ⅰ』（飯田操訳、平凡社ライブラリー、1997年）……釣りの快楽を説く『瞑想する人』の聖典（1676年版の第1部）。

◆C. コットン、R. ヴェナブルズ『完訳 釣魚大全Ⅱ』（飯田操訳、平凡社ライブラリー、1997年）……C. コットンによるフライフィッシング（マスとグレイリング対象）の指南書（第2部）、およびR. ヴェナブルズによる素朴で伝統的釣り（マス、バイク、サケ、コイ、テンチ、ウナギ、他対象）の実践書（第3部）；第2部、第3部を含めた『釣魚大全』、初めての完訳。

◆エドワード・グレイ他著『釣り師の休日』（飯田操訳・編、角川書店、1998年）……6章に分けた古今東西の釣および水のネイチャーライティング選集。

◆シーア・コルボーン、ダイアン・ダマノスキ、ジョン・ピーターソン・マイヤーズ（共著）『奪われし未来』（長尾 力訳、翔泳社、1997年）

◆H. D. ソロー『市民の反抗 他五編』（飯田実訳、岩波文庫、1997年）……ソロー関係の邦訳がさらに充実。従来「散歩」と訳されることの多かった名篇"Walking"が「歩く」と訳されていることも訳者の見識をうかがわせる。翻訳とはただの仲介行為ではないことを思わせる貴重な仕事である。

◆スー・ハベル『虫たちの謎めく生態』（中村凧子訳、早川書房、1997年）……女性ナチュラリストによる新昆虫学。

◆ロバート・P・ハリスン『森の記憶：ヨーロッパ文明の影』（金利光訳、工作舎、1996年）……文明を森林の切り開かれた空間存在として捉え、森林の持つ明と暗、喜悅と恐怖などの矛盾する表象の中に現代の生体環境の抱えるジレンマを見いだす。ギルガメシュ神話からWaldenの森まで扱った広範、哲学的でやや難解。

◆ヘンリー・ベストン『ケープコッドの海辺に暮らして一大いなる浜辺における1年間の生活』（村上清敏訳、本の友社、1997年）……アメリカン・ネイチャーライティングの古典的系譜は、ソロー、S. クーパー、ミューア、M. オースティン、そしてこのベストンでようやく一つに繋がる。ミッシング・リンクの一つ、ベストンの邦訳がついに登場した。今後、日本における研究にまた一つはずみがつくことだろう。ケープコッドに造詣深い村上氏の秀逸な訳も堪能されたい。

[テキスト]

◆ブルース・アレン著、村上清敏・恭子編注『大地の声ーネイチャーライティングへの誘い』[Bruce Allen, *Voices of the Earth: Stories of People, Place and Nature*] (松柏社、1997年)

◆レイチェル・カーソン著、小林章夫・岩政伸治編注『未来への贈り物』[Rachel Carson, *The Sense of Wonder*] (郁文堂、1998年)

◆G. スナイダー著、田中泰賢、山里勝己編注『自然との語り』[G. Snyder, *The Practice of the Wild*] (英宝社、1996年)

◆ジョン・ジャノヴィJr. 著、野田研一、加藤貞通、結城正美編注『地球が滅べば人も滅びるーエコロジーとは何か』[John Janovy Jr., *Ten Minute Ecologist*] (金星堂、1998年)

◆ポー、ソロー他著、Scott Slovic、伊藤詔子、結城正美編注『アメリカン・ネイチャーライティング選集 森と海辺のいきものたち』[Poe, Thoreau et. al., *Other Nations: Animals in American Nature Writing*] (鶴見書店、1997年)

◆姫路短期大学『環境と人間』（星雲社、1996年）

◆姫路短期大学『環境と情報』（星雲社、1997年）

◆京都大学総合人間学部『環境としての自然・社会・文化』（京都大学出版会）

◆広島大学総合科学部『文化と環境』（文化評論社、1998年）

書誌情報収集にご協力いただいた皆様（生田、石幡、伊藤、加藤、野田、多田、結城）に編集部よりお礼申し上げます。今回は、作品は和書と翻訳に限りリストアップしました。洋書は研究書、雑誌評論のみ扱っています。この他にも大切なものが多数出版されていると思います。1997~98年刊の注目すべき出版物にお気づきの際は、次号に掲載しますので、書誌をお寄せ下さい。コメントは短めをお願いします。

ASLE-Japanのメーリング・リストに参加しましょう。

ASLE-Japanの会員が情報交換や事務連絡をするためのメーリング・リスト、aslejを運営しています。メンバーはASLE-Japanの会員に限らせていただいていますので、登録は手動で行なっています。メンバー登録ご希望の方はtuti@icarus.ilcs.hokudai.ac.jp(土永)までメールアドレスをお知らせください。その際に、ご自分のメールアドレスをASLE-Japanの会員名簿に掲載して公開してもかまわないか否かをお書き添え下さい。なお、この登録申し込み方法は変更されることがあります。最新情報は<http://icarus.ilcs.hokudai.ac.jp/aslej/aslejml.html>でご覧下さい。

◎事務局より：

1) ふたたび事務局移転のお知らせ

事務局が3月15日以降、下記に移転いたします。たびたびの移転でご迷惑をおかけします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

新事務局住所：

住所：〒352-0003 埼玉県新座市北野1-2-26

立教大学 観光学部 野田研一研究室内

E-mail: noda@rikkyo.ac.jp

2) 本年4月現在、会員数は198名です。新しく入会された方々の積極的な活動、助言、提案、なんでもけっこうです。事務局宛お寄せ下さい。ニュースレターへの寄稿もお待ちしております。

◎今年度会費未納の方は同封の振替用紙にてご納入下さい。また、ASLE-Japan/文学・環境学会(ASLE-JはThe Association for the Study of Literature and Environmentの略でアズリー・ジェイもしくはアズリー・ジャパンと読んで下さい)ではネイチャーライティングに関心のある方々の入会を常時受け付けています。ご希望の方は事務局までご連絡下さい。

年会費 一般 ¥3,000 学生 ¥2,000

◎1998年度ASLE-Japan/文学・環境学会 第4回全国大会について下記のように日程と会場が決まりました。プログラムの詳細は7月にお送りします。なお、大会運営をお手伝い下さる方がありましたら事務局までご一報下さい。

日程：10月18(日)、19日(月)

○第1日目 10月18日(日)

場所：ホテルニューヒロデン (Tel:082-263-3456)

午後17:30~18:00 役員会

午後18:00~20:00 懇親会

○第2日目 10月19日(月)

場所：アステールプラザ (Tel:082-244-8000)

総会 9:00~10:00

午前 研究発表、シンポジウム

午後 講演会等

◎1998年度スケジュール

4月末日 全国大会研究発表応募〆切

5月23日(土) 今年度第1回役員会及び研究会(京都市)

10月18日(日)~19日(月)

ASLE-Japan/文学・環境学会 98年度全国大会

場所：広島市

ASLE-Japan/文学・環境学会第4回全国大会での研究発表をご希望の方は4月30日までに「タイトル」と「要旨」を添えて下記へご連絡下さい。発表内容によってはシンポジウム形式、円卓セッション等になる場合もあります。その際には改めてご相談します。個人、共同、グループを問わず奮ってご応募下さい。また、写真その他文学以外のメディア、ジャンルに関するものも積極的にご提案下さい。展示室も用意する予定です。ご利用希望があれば同じく下記までご連絡下さい。

◎研究発表募集！

Call for Papers at ASLE-Japan 4th Annual Meeting in Hiroshima

必要事項：

- 1) タイトル+要旨【約400字(日本語)、または250語(英語)】
- 2) 氏名、所属、住所、電話番号、ファックス番号、E-mail番号を明記して郵便で下記へお送り下さい。

連絡先：

〒921-8112 金沢市長坂2丁目17番9号

村上清敏(大会実行委員)

Tel:

FAX: 076-234-4170 (金沢大学)

E-Mail: melville@kenroku.ipc.kanazawa-u.ac.jp

〆 切：1998年4月30日

【編集後記】■ニュースレター第6号、1998年度の第1号をお届けします。本号は昨年の秋に慶応義塾大学行われた全国大会での研究発表等のレジュメを中心に紙面作りをしました。日本のネイチャーライティングについての発表が大半を占め、ASLE-Japanが極めて健全な方向に向かって発展していることがわかります。■インターネット関連で最近しばしば「コンテンツ」というカタカナ語を見かけますが、ニュースレターもコンテンツの充実を更に図ろうと思います。いよいよ会誌の発行も決まりました。ニュースレターはそれとの棲み分けを考慮しながら、今後は書誌情報や会員の消息などに重点を移していく予定です。情報をどしどしお寄せ下さい。またどのような情報を掲載すべきかご意見もお寄せ下さい。■最後に、電子メールの登場は情報のやり取りを極めて容易にしてくれたものの、かえって不便と窮屈を感じることもあります。それが極めて便利のために、情報提供を電子メールを利用している一部の人々にばかり頼る傾向が顕著になってきたからです。電子メールを利用していない人々を排除することになりはしないかと危惧しています。(J)



ASLE-Japan
文学・環境学会
Newsletter No.6

【発行】

ASLE-Japan/文学・環境学会

事務局：立教大学 観光学部

野田研一 研究室内

〒352-0003 埼玉県新座市北野1-2-26

【編集】

編集代表 大神田 丈二

1998年2月4日発行

E-Mail: noda@rikkyo.ac.jp